

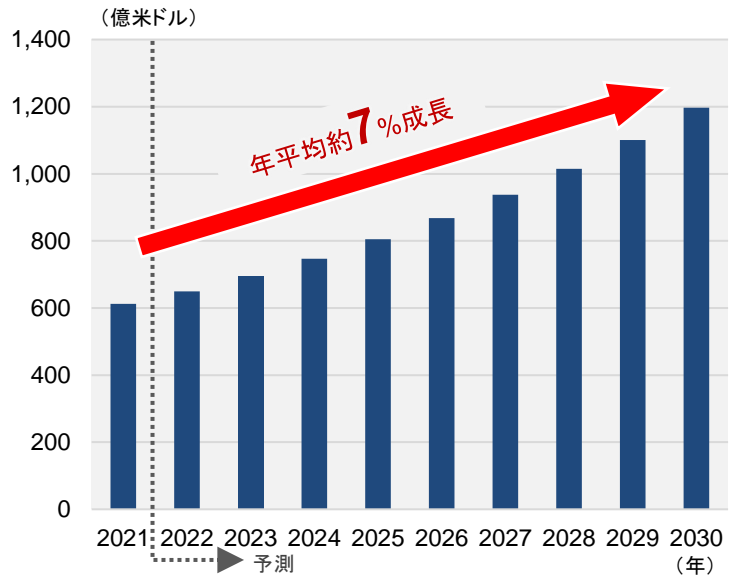
- 手術支援ロボットは、患者の体への負担が少ないことに加え、高精度な手術が遠隔操作で実現できることなどからも、普及し始めています。
- 手術支援ロボットのメリットは、従来の手術に比べて切開を最小限に抑えられるため、感染症リスクや外傷を減らすことなどが可能となり、アームを動かすことで正確性も向上することです。
- 一方、機器の購入や消耗品、保守などにかかる費用が高額で、指導者や研修施設の不足といったデメリットはありますが、普及するに伴い、徐々に解消されていくとみられます。

市場拡大が期待される手術支援ロボット市場

- 近年、ロボット技術が従来の手作業に比べて、臨床的なメリットがあると証明され始め、ロボットを使った手術に対する保険適用範囲も拡大していることなどから、手術支援ロボットの需要は高まっていくと期待されます。
- 2030年の市場規模は2021年の2倍近くとなる1,100億米ドルを超え、年平均約7%の成長が見込まれています。

■ 手術支援ロボット市場の推移

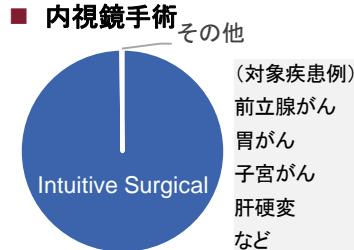
(2021年～2030年 ※2022年以降は予測)



出所: Next Move Strategy Consulting

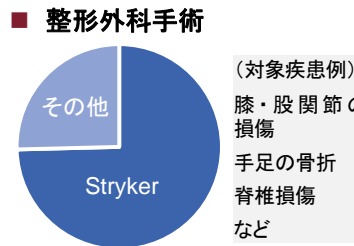
※上のグラフは過去のものおよび予測であり、将来を約束するものではありません。※公開情報など信頼できると判断した情報をもとに日興アセットマネジメントが作成。情報の正確性・完全性について当社が保証するものではありません。ページ記載の銘柄について、売買を推奨するものでも、将来の価格の上昇または下落を示唆するものでもありません。また、当社ファンドにおける保有・非保有および将来の銘柄の組入れまたは売却を示唆・保証するものでもありません。

領域別手術支援ロボットのトップメーカー



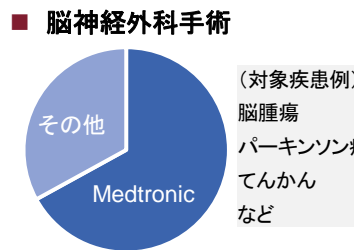
Intuitive Surgical(米): 1995年設立

- 「ダビンチサージカルシステム」および関連製品の販売やサポート、保守のほか、テクノロジートレーニングなどを提供しています。
- ダビンチは、患者に触れることなく、執刀医が患部の立体画像を見ながら、可動域が広く手振れ補正機能を備えた専用鉗子などの手術器具を取り付けた4本のアームで遠隔操作する手術支援ロボットです。
- 2018年、1本のアームに4つの手術器具(従来は1つ)を取り付けるタイプが発売され、体表の切開が最小1つで済むようになりました。※日本へは2023年に投入



Stryker(米): 1941年設立

- 整形外科医のStryker氏が、当時の医療用具への不満から、医療機器の開発に取り組んだことに始まり、医療テクノロジーのリーダーとして発展を続けています。
- 75以上の国々に、医療・手術機器や整形外科、脊柱関連分野など、幅広い領域で医療製品やサービスを提供しています。
- フォーチュン誌の「世界で最も称賛される企業」の医療製品・医療機器産業部門に22年連続で選出されました。



Medtronic(アイルランド): 1949年設立

- 医療用電子機器を修理したことに始まり、電池式ペースメーカーや心臓埋め込み型遠隔モニタリングシステムなどを世界で初めて世に送り出しました。脳神経関連製品では、「Stealth Autoguide」(定位手術支援ロボット)などがあります。
- Stealth Autoguideは、脳腫瘍の手術の場合、治療に必要な電極を挿入する位置と脳深部の測定位置をロボット制御により自動で行うことが可能で、患者の体への負担が少なく、施術翌日から脳波記録が開始できるメリットがあります。

出所: 経済産業省資料より ※2020年の世界シェア